

黄遵憲がとらえた明治の子ども (1)

『日本雑事詩』「幼稚園」、「正月の遊び」を
手がかりにして

首藤 美香子

はじめに

清国の初代駐日公使、何如璋に随い、明治十年末（一八七七）に来日した黄遵憲が、四年余りの短い滞在期間中に中村正直（敬字）と深い親交を結んでいたことは、先行研究によってかなりの程度明らかにされている。詩人としても名高かった黄遵憲が在日中にしたためた文章の主要なものほとんど、中村が刊行した『文学雑誌』に掲載されているなど、黄遵憲の方から中村に積極的に

接近していった形跡が見られ、中村を通じて西欧の近代思想や新文物の摂取が図られたことは確からしい。⁽¹⁾

ところで黄遵憲が来日したところの中村は、明治八年（一八七五）十一月に開校したばかりの東京女子師範学校の初代摂理として、また翌年十一月に設立された東京女子師範学校附属幼稚園の建議者として、日本の女子高等教育と幼児教育の基礎づくりに尽力していた。黄遵憲ら清国公使一行も、中村の招きに応じて女子師範を訪問

したことは、以下の文献から確認できる。黄遵憲自身の手になるものとしては、『日本雜事詩』58・59「女子師範学校」、60「幼稚園」が、中村のものとしては、『敬宇文集』巻四「送何公使序」に「亦嘗^テ見^レ泣^ク于余所^ニ攝理^{スル}之^ニ女校^ト。乃皇后所^ニ創設^{スル}也。」がある。

さらにまた、当時附属幼稚園の保姆見習いであった氏原銀による次のような談話も貴重な証拠となる。附属幼稚園は官立の幼稚園としては最初のものであったため、世人の注目の的となり、米国大統領グラント氏夫妻など外国人の参観も相次いだ^①が、清国公使一行の訪問は特に印象深く記憶されていたようだ。

幼稚園というのが大変珍しかった時なので、参観人がかなり多くございました。田中不二磨夫人も丸鬚で時々参観せられました。この参観人の内外国の公使もあつたのですが、この中で一番鄭重な待遇をしたのは支那公使で、従者数名を連れ（一行十四名）参観せられました。開誘室を夫々通られて、最後に遊戯室に來られました^②が、どういふわけか、幼児は立派な椅子

に腰かけて居たのに、このお客様の公使には椅子をあげませんでしたので、立ったままで、幼児が遊戯してゐるのをデット見^テ居^レましたが、靴のつま先で、コツコツと拍子を合わせながら見て居られた様子の熱心なのが思ひ出されます。その後で、縦覧室で西洋料理（最上等の品で、精養軒からとりました）を饗応しました。其室内の裝飾も立派に、小鳥の籠を下げたりしてゐたのでございます。來賓のお歸りになった後で、職員一同、見習いに來て居りました木村さんや私も、この中に入^{ッテ}御馳走になりました。何分西洋料理が始めてなので、よく食^ベ方も知りませんが、自分は平気で食^ベたのですが、先生方に大分冷汗をおか^シせましたとのこと、後でよく作法を教^へていただきました。⁽²⁾

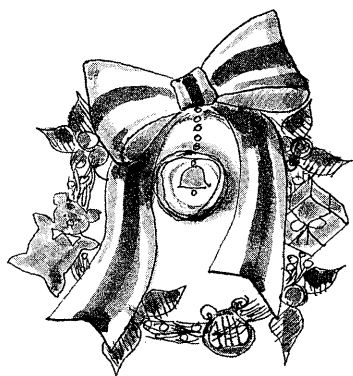
中村と黄遵憲ら清国公使との浅からぬ關係が、この回顧録からも示唆されるであろう。また興味深いことに、最大限の敬意を表した幼稚園側の歓待ぶりに比して、幼児たちはお客様の公使にすすめるべき椅子を占領し、無邪気に幼稚園での主役ぶりを發揮していた点である。そ

の幼児たちの傍若無人な態度にも一行は不快の意を示すことなく、むしろ熱心に観覧していた様子であったらしい。明治を代表する開明的な知識人のひとりであった中村から貪欲に吸収し、自らの近代的思考を育んでいったとされる黄遵憲は、フレイベル主義にのっとった附属幼稚園から、何を感じとり、学びとったのだろうか。中国で最初の幼稚園が設立されたのは、一九〇三年武昌（日本人保母 舟雪江氏が派遣された）においてであるが、黄遵憲ら清国公使一行のこの日の訪問は、中国幼児教育史においていかなる意味をもったであろうか。あるいはそれは、その後の中国の激動のなかで、何の痕跡を留めることもなく消え去る運命にあった、歴史の泡沫のひとつだったのかもしれない。

しかし、そう考えるにしては少し気がかりな点がある。『日本雑事詩』に収められた「幼稚園」の漢詩は、離日後書き改められているからだ。⁽³⁾この原本と定本を比較してみると、詩趣が相当異なることがわかる。一体なぜ書き改められたのだろうか。この改変については私は

専門外なので、黄遵憲の思想遍歴や創作上の問題に立ち入って考察することはできない。したがって、なぜという問いを設けることは残念ながら避けざるを得ない。

そこで、この二つの詩および子どもたちの遊戯を題材としたもうひとつの詩134「正月の遊び」を、黄遵憲の内面あ



るいは中国幼児教育史の行末を写し出す鏡としてでなく、日本の明治初期の子どもの姿を写し出す鏡として、

転用させていただきたい。黄遵憲のまなざしが切り取った子どもの姿を、他の来日外国人が残した子どもに関する記録との比較分析を通じて、また附属幼稚園における初期の教育の実態（唱歌・遊戯）、さらには西欧化の進行とともに様相を変化させる子どもの文化・風俗との関連から可能な限り明確にしてみたい。そして、黄遵憲の「幼稚園」に関するふたつの漢詩が示唆するところの意味を、日本近代の子どもの問題という観点から述べてみたい。

〈原本「幼稚園」〉

原本「幼稚園」は、次のような詩である。

都棚孩児赴甲科

垂髻困坐抱書哦

開來花面粉塗沫

愛挽師衣踏踏歌

誤読の謗りを免れないことは承知のうえで、私なりに鑑賞してみよう。

自分の足で歩くこともままならぬ程の、幼い子どもたちが大人の背におぶわれて、甲科（学ぶ場所の意に解釈）の門をくぐっている。先生を囲んでまあるく座り、黒髪をさらさらと揺らしながら、甲高い声でたどたどしく本を読む。自由時間には、顔を火照らしはあはあと息をはずませながら、一心に泥遊びに興じている。先生の着物の袂にまとわりつき、ぶらさがり、内から湧き上がる生の衝動を抑えきれぬかのように、全身を奮わせて歌う。

この詩は、大人の背にしがみつく子どもの頼りなさや小ささ、滑稽なくらい大真面目に学ぶ姿、駆け回り跳びはねながら上げる陽気な笑い声、甘酸っぱい汗のにおいなどが、臨場感をもって生き生きと伝わってくるようだ。黄遵憲の筆は、子どもの群れが発する熱のざわめき

だけでなく、個に肉迫したアングルで、子ども特有の言動の輪郭をもあざやかに際立たせているように思う。また「孩児」「垂髫」「花面」と子どもの存在にビタリと焦点があてられているのがわかる。黄遵憲の子どもの動きを前面に描き出した創作態度は、現存している漢文による参観記、例えば第一高等学校教授 鹽谷時敏（記載の目的は不明）が幼稚園の物理的環境や制度的側面、教育的意義を記しているのに比べてもあきらからである。⁽⁴⁾

ところで黄遵憲が解説に付している幼稚園の保育内容は、明治十年に制定された幼稚園規則に一致しており、物品科・美麗科・知識科およびこの「三科包有スル所ノ子目」である、フレーベルの二十遊嬉（恩物）のことである。創設当時の保育内容で、特に注目すべきは唱歌であった。よって黄遵憲が「愛挽師衣踏踏歌」と詠んだ部分は、後に子どもの世界を席捲することとなる唱歌・遊戯の台頭を記録したものといえる。

幼児向け唱歌は旧来からあったのではなく、豊田英雄ら創設当時の保姆が外国の歌詞を翻訳し、また自ら創作



幼稚園に於ける鳩巢（家鳩）の遊戯の図

▲図1 「幼稚園に於ける鳩巢（家鳩）の遊戯の図」（明治10年頃の実写図）
『年表・幼稚園百年史』（お茶の水女子大附属幼稚園発行）より

して、幼稚園に定着させたものである。当初は曲は雅楽調であり、式部寮の伶人に委嘱して作曲された。お茶の水女子大学図書館入口に掲載されている「幼稚園に於ける鳩巢（家鳩）の遊戯の図」は、明治十年ころの実写図（図1）とされる。黄遵憲も同様の光景を見たことだろう。少し横道にそれるが、鳩巢（家鳩）の唱歌・遊戯について簡単に紹介したい。

〈唱歌・遊戯〉

この家鳩の唱歌は、フレールベルの『母の歌と愛撫の歌』に所収されている「鳩舎の歌」で、桑田親五訳『幼稚園 下巻』（明治十一年）のなかで以下のように訳され、遊び方が紹介された。

鳩舎あけて鳩を放そ（稚児等円形中を出でて行く）

鳩は何処へ行た田畝に遊ぶ草原に遊ぶ（円形を出てたる稚児の遊ぶうちは繰り返しこの句をうたふなり）

早く帰れ鳩舎閉よ（声を高ふして三度この句を謡ひ円形に帰

るべきを示すなり）

帰らぬから閉よソラ閉まった（この句を謡ふ時は帰って来るとも円形に入るは能はざるなり）⁽⁵⁾

この訳では直訳で歌うことができない。これをさらに豊田英雄が訳したものが次のもので、雅楽調の曲によって広く歌われたという。

いへばとの すのとひらきて

はなちやる ゆくゑやいづこ

やまにのに しばふのはらに

あそぶらん あそびてあらば

かへらなん とくかへらなん

かへらずば すのととちてん

すのととちてん⁽⁶⁾

倉橋惣三（大正六年より二五年間にわたり附属幼稚園の主事をつとめた）は、このようにして「五六歳の幼児

がたがひに手をつなぎ合つて輪を作り、唱歌をうたふ有様は、当時にとつて新しくもまた珍しい光景で、さぞ人々の心を惹いたことであろう。「幼児相集まつて唱歌をうたふ、この事がすでに従来の教育のどこにも見いだせなかつた新しいことではないか。そして殊に外に於て恩物本位の保育中にこの唱歌の織り込まれてゐることは、今より一層子供の声のあどけなき、音調の和やかさを偲ぶに余りあることであつたと思ふ。」と、唱歌・遊戯の漸新性について述懐している。(7)

附属幼稚園における唱歌・遊戯の導入と相前後して、明治十二年には文部省に音楽取調掛が設置され、洋楽が取り入れられ、明治十四年には、邦楽に洋楽が加味された文部省編の「小学唱歌集」が出版され、そのなかの「蝶蝶」「大和撫子」などは、幼稚園においてもその後長く歌われた。また附属幼稚園が主となり音楽取調掛の協力のもとで、一層幼児向きの唱歌が作られ、明治十六年、これがまとめられた。なお、それは明治二十年に「幼稚園唱歌集」として刊行されるに至る。

したがつて、黄遵憲が来日していた明治十年から十五年は、子どもの世界がある過渡期を迎えた時期でもあつた。再び、倉橋の言を借りよう。

然るに前述のごとく明治十四年ごろから唱歌が発達して来ると共に、これに伴ふ唱歌遊戯、洋風遊戯が隆盛になつて来て、一般の子供の遊びが、ガラリと変わつて行つた。即ち伝統の遊戯は、そのありのまま、口伝へに次から次へと伝わつて来たのであつて、新作されるものには無い。一方小学唱歌集が出版されて、これに伴う遊戯が作られてくると共に、今迄巷に伝へられて居た童謡遊戯は、すげなく追いやられ、忘れられてしまつたという有様になつた。幼稚園の遊戯唱歌が、非常な勢いで子供達の世界へ進出して行つて忽ち子供の世界を風靡してしまつたのである。(8)

以上のことから、黄遵憲の「幼稚園」の詩（原本）が、幼稚園という場が子どもの世界に発した新たな力の一端を、奇しくも感受していたことが理解できよう。

(お茶の水女子大学大学院)

東洋文庫 二二 一九五八 解説 (実藤恵秀) P. 309—322

(4) 倉橋惣三 前掲書「幼稚園参観記及び追憶」P. 79—80

(5) 桑田親五訳『幼稚園』は、岡田正章監修『明治保育文献集

第一巻』ひかりのくにに所収。「鴿舎の歌」P. 338

(6) 倉橋惣三 前掲書 P. 246

(7) 倉橋惣三 前掲書 P. 232

(8) 倉橋惣三 前掲書 P. 310

《註》

(1) NORIKO KAMACHI : REFORM IN CHINA Huang

Tsun-hsien and the Japanese Model, Council on

East Asian Studies, Harvard Univ. 1981. pp. 94-100, 121

— 122, 262—263

佐藤保「黄遵憲と日本」『近代文学における中国と日本』

汲古書院 一九八六 P. 55—76

佐藤保「客家の女性 黄遵憲の詩を中心に」お茶の水

女子大学文化センター年報第一号 一九八七 P. 13—23

(2) 倉橋惣三 新庄よしこ『日本幼稚園史』フレールベル館 一

九五六 P. 63—64

(3) 黄遵憲の原本執筆の時期は、来日前半の明治十一年秋から

十二年春にかけてとみなされており、また定本はその八年

後、ロンドン総領事をつとめるかたわら執筆されたといな

されている。実藤恵秀 豊田稯訳『日本雑事詩』平凡社

